

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月5日発行「補習校だより」第12号より抜粋

体言止めや、……(点線)や (中線)を使いすぎない。

体言止めや……や は、言葉にならぬほどの感動や余韻や言い差しを表現しようとして使われます。次の a・b はたしかに平板であり、c～e にはそれなりの効果が認められましょう。

- a 大空は、どこまでも澄みきっています。
- b どこまでも澄みきった大空です。
- c どこまでも澄みきった大空。
- d どこまでも澄みきった大空……。
- e どこまでも澄みきった大空 。

しかし、書き手の重い感情や深い思い入れに何度も付き合わされるのは、読み手にとって楽なことではありません。それに、何度も使ったら、ただの書き癖と受け止められ、意図した効果を発揮しません。明快に語りきらない書き手に対していら立ちを覚える読み手もいることでしょう。

「書くことは考えること」「書かなければ考えたことにならない」という言葉の意味は、体言止めや……や に託そうとしている光景や感情や意識を明らかにする過程にこそ書くことの意義があるということです。これらを安易に使うことは、理解や判断を読み手に委ねることにほかなりません。表現技巧を駆使しているのではなく、表現力が不十分なのです。何気なく使った……や の部分を言葉に換えていく推敲段階は、深く考え、的確に表現することの訓練として、極めて密度の高いものなのです。